



平成30年7月2日(月)

# 藤 棚

第355号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>  
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

## 凶悪犯罪の多発と生徒の安全

校長 小川義男

新幹線の中で、犯人が凶刃を振り回し、乗り合わせていた人々に危害を加えた。被害女性を庇おうとした、勇敢な男性が殺された。この男性は、学歴も極めて高く、(東大卒 同大学院修了)、国家、社会のために、今後どれほど活躍できた方か分からない。ご家族の皆様の悲しみ、無念は、どれほどのものであろうか。心からお悔やみ申し上げます。国民栄誉賞というのは、このように、勇敢で心の優しい人物にこそ、与えられるべきではないだろうか。

凶悪犯罪が続く。驚くのは、犯人のほとんどが、無職者だと言う事である。このような無職犯人達は、家族を脅して飲食にありついているのか、それとも、生活保護その他の「社会福祉制度」を利用して生活しているのか。働かずに、他人が汗水流して獲得したものを、無為徒食して、犯罪に走ることが許されるとすれば、世の中、どこかが狂っていると言わなければならない。

本校は、千二百五十人の生徒をお預かりしている。中には、小学校を終わったばかりの中学一年生もいる。全校には、校内外に防犯カメラのネットが、緻密に設置されているが、交番の中の、警察官の拳銃が奪われ、刺殺される時代である。その拳銃で、近くの小学校の警備員が射殺された。発砲音を聞いた警察官が直ちに駆けつけ、向かってきた犯人を銃撃し、犯人を無抵抗化させると共に、小学生を守った。しかし高齢の警備員が犯人に射殺されている。その責任感に敬服すると共に、小学生を守った、この警備員並びに銃撃した警察官の正当防衛行為に、深く深く敬意を表したい。

学園は体育祭を終わり、学園祭(狭丘祭)を、秋に控えている。その前に夏休みもある。旅に危険がなければ良いが、海も川も危険が一杯である。海には離岸流もあるし、川口には、沖まで流し去る「塩っぱくない」「川口流れ」もある。女生徒にとっては、日没以後の他出には、常に危険を伴うと思わなければならぬ。

近頃は、親殺し、兄弟殺しに始まり、ひどいになると、我が子まで虐待死させる親もいる。

昔、「自己並びに配偶者の直系尊属を殺した者は、死刑又は無期懲役に処す」というのが、法制上の立場であった。ある事情で、これが廃止されたが、どうもその後、親殺し、尊属殺しが多発しているように思われてならない。

親が子供を殺すなどということは、考えられない話だが、今の世の中で、そんな酷い親もいな

いわけではない。完全にヘルプレスな我が子を、虐待死させるなどは、到底人間のすることとは思われない。「鋸引きの刑」にでも処してやりたい。

私は「卑属殺」「嬰兒殺」などという犯罪構成要件を設けて、すべて死刑または無期懲役に処すべきだと思う。

少年(満 20 歳未満の者)が犯罪を犯した場合には、少年法が適用される。殺人を犯した場合でも、ほとんどは、二年ほど少年院に行っていれば、解放される。その氏名、年齢等は、たとえば犯人が 90 歳になっても、死の瞬間まで、秘密にされる。死んだ後も同様である。

少年の中には、その事を熟知して、犯罪を犯す者もいる。それが殺人犯であっても、配偶者が死の瞬間まで、全く知らないというようなことが、実際には起こり得るのである。

そのような犯人が、家庭を形成して、我が子を虐待死させるというようなケースが、実際には起こっているのかも知れない。

少年の一部は、この事を熟知して犯行に及ぶ場合がある。まさに「武士の切り捨て御免」と言うようなケースが、現代社会には存在しているのである。

確かに犯罪少年を、その幼さの故に保護することは大切である。だが私は、18 歳を超えた人間を少年として扱うべきではないと思う。また、強盗 殺人 強姦の三つは、少年法の適用から排除すべきであると思う。

世の中のすべてが、弱者保護の名の下に、反社会的行為に対し、寛大過ぎるのではないだろうか。

今回の交番における拳銃強奪、殺人事件は、悪質の程度も、度を越したものであり、本来なら、即決裁判で死刑を執行して貰いたいところである。銃声を聞きつけて直ちに駆けつけた警官が、正当防衛として銃撃し、犯人は重傷を追ったとのことであるが、反撃した警官は、実によくやった。一方、交番の裏口をノックされてドアを開け、直ちに傷害、刺殺されるに至った警官は、不用心すぎる。警察官全体の綱紀の緩みとして厳しく非難されなければなるまい。交番の裏口は、本来、危険に際しての警官、その他の人の逃亡口として用意されているものである。そのあたりの指導も徹底していなかったのであろうか。

ともあれ、社会全体に、悪質犯罪に対する怒りが鈍磨してきているのではないだろうか。学校においても、甘やかしの気風が<sup>びまん</sup>瀰漫し、勤勉に努力したり、忍耐したりする事を忌避する傾向も生まれつつある。

怠け者は、安易に脱落するというのではない。しかし、今の学校生活が辛いので、安易に退学し、通信教育で、あるいは大検でという傾向が生まれつつある。

大検は、少し努力すれば、簡単に合格できるものになってきている。往年の「専検」(専門学校入学資格検定試験)とは、桁違いの容易さである。

旧制中学に学んでいた私たちも、「専検合格者」と聞いただけで、震え上がったものだ。「尊敬したなあ」。

世の中すべてが安易になってしまっている。若者に厳しさを求める規範力が衰えているとするならば、若者自身が、自らに厳しい課題を課し、日々、努力し続けねばなるまい。

それだけに私は、日々自らに厳しい課題を課し、学問にスポーツにエネルギーを燃やしている生徒諸君を、心から尊敬するのである。諸君は、意志弱き民衆のためにも、自らを厳しく鍛え続けて行かなくてはならない。